

片思いの相手は幼馴染のママ！？　好きが爆発する超純愛ラブコメ！



著者：望 公太 イラスト：ぎうにう

<https://dengekibunko.jp/product/mamasuki/321903000173.html>

★特別書き下ろしSS『娘じゃなくて私が好きな!?』

「タックくん」

「なんですか、綾子さん」

「なんだか……大変な世の中になってしまったわね」

「そう、ですね……。まさかここまで大事になるとは思いませんでした。オリンピックをやるかやらないか検討してた時期が、今は遠い昔のように感じます」

「今となってはもう、やれるわけがないだろ、って感じだもんね」

「出版業界も……大変な事態になってるみたいですね」

「そうね。今、どこの編集部もテレワーク推奨になって、みんな家で仕事するようになってるから」

「編集さんもやっぱりそんな感じなんですね」

「編集部だけでなく、アニメ業界とかのコンテンツ業界も変わってきてるみたいね」

「ふむ？」

「コンテンツ業界だけでなく、他の業種もそうだと思うんだけど……『これ、わざわざ集まらなくてもビデオ通話でよくね?』と思っていた会議が、今まではなあなあで続いていたの。でも諸々の自粛要請があってから、一気にビデオ通話の会議が広まったみたい」

「はあー、なるほど」

「決して今回の騒動を肯定するわけじゃないけれど……昔からの根強い風習を変えるためには、なにかしらのインパクトがないとダメなのかもしれないわね」

「難しい話ですね」

「編集業のテレワークも、いざやってみると意外になんとかなるって人が多いわね。もちろん出社しなきゃできない業務もあるけど……今回の騒動が収束した後でも、案外出版業界のテレワークは普及していくのかもしれないわ」

「ふむふむ」

「ほら、私も一応、編集者っていう設定じゃない？　シングルマザーやりながら、ライトノベルとかソーシャルゲームの編集業やってるっていう」

「設定とか言っちゃうんですね」

「うん、言っちゃう。それでね、私の設定——『東北在住で在宅ワークしてるライトノベル編集者』って……ぶっちゃけ、かなりファンタジーな設定なのよ」

「まあ……無理がありますよね」

「そう、無理があるの、現実じゃありえないの。東北在住で編集業なんてできるわけないから。出勤しなきゃできないことはたくさんあるし、外部の人との打ち合わせだってたくさんあるし……とにかく編集業なんて激務なんだから」

「一卷の段階で、若干編集部からは突っ込まれましたよね」

「そうだったわねー。でもまあ、『お仕事がメインの作品じゃないから』ってことで、東北在住の在宅ワーク編集者というファンタジー設定のままで行くことになった……でも」

「でも？」

「今後さらにテレワーク文化が根付いていったら……案外、東北在住テレワーク編集者っていうのも、ファンタジー設定じゃなくなるのかもしれないわね。そう遠くない未来に、普通に地方に住みながら第一線の編集として活躍できる時代が来るのかもしれない。令和の編集者には『都市圏に住んでいなければならない』みたいな常識も縛りもなくなっていくのかもしれない」

「確かに今回の騒動で、いろんな仕事での働き方っていうのが……良くも悪くも変わっていきそうですからね」

「そう、つまり——私は時代の最先端編集者だったということね」

「……え？」

「特に深い考えもなく作者が住んでる東北の地方都市を舞台にして、特に深い考えもなく担当編集が所属してる『ストレートエッジ』をモデルにした会社で働かせて……その結果生まれたのが、『東北在住のテレワーク編集者でシングルマザー』という現実じゃありえないファンタジー設定だったのに……まさかそれが、期せずして時代を先駆けた『編集者像』となってしまうなんて……まったく、これだから創作は面白いわ」

「い、いろいろ裏事情ぶっちゃけすぎじゃないですか……？」

「まあなにとはともあれ……大変な時期だけれど、みんなで力を合わせてこの困難を乗り越えていきたいわね」

「……雑にまとめに入りましたね」

「手洗いうがいをしっかりして、不要不急の外出は控えること。私達の本を買って欲しい気持ちももちろんあるけれど……決して無理はなさらないように。売り上げのことは……そこまで心配しなくても大丈夫だと思う。出版社だって、いろいろと考えて動いてくれてるから」

「そうですよね。今回のこのＳＳ企画だって、買いたい本を買いに行けずにいる読者のために、出版社がなにかしようって動いてくれた結果ですから。そんなありがたい企画なのに……なんでこんな、楽屋ネタの裏事情ばっかり」

「うぐ……しょ、しょうがないでしょう？　私だっていろいろ考えたわよ。編集部からも『時期が時期ですので、読者が楽しくなるような、なにか明るく楽しいラブコメ展開を』ってオーダーされたしね。でも……」

「でも？」

「……考えても考えても、『私とタックくんと一緒に手を洗う』って展開しか思いつかなかったの。一緒に手を洗って、そしていつの間にか、お互いの手と手を洗い合う、みたいな……」

「え？　それ、いいんじゃないですか？　時事ネタとしての的確だし、ラブコメ的にも美味しいような……」

「そうなんだけど……でも、なんていうか——他の人とかぶりそうな気がして」

「あー……」

「こんな一斉にＳＳ公開なんて企画やったらさ……絶対誰かがやるわよね。『ヒロインと一緒に手を洗う展開』……。あとありそうなのは『ヒロインとビデオ通話』とか『ヒロインとオンライン飲み会』とか……」

「うわー……ありそう」

「この手の文庫にも収録されないＳＳをやるってなったら、時事ネタに走る人が多いわけだし……そうになったらもう、パターンが限られてくるわよね。大人数で一斉にＳＳ書いたら、絶対に誰かとネタがかぶっちゃうのよ……」

「……………」

「今はもう、作家同士での心理戦が始まってるところね。もしかすると、みんなが『ヒロインと手を洗う展開は、他の人もやりそう』って考えて避けた結果、逆に誰もやらない、みたいな展開もありえるかもしれない。それで深く考えずにやった人が、堂々と美味しいネタを使えるというパターンも……」

「か、考えすぎじゃないですか……？」

「そうなんだけどさ。そうなんだけどさあ……！　一回気にしたらどうにもなくなっちゃって……。結局こうして、いつも通りにメタに逃げるＳＳになってしまったというわけなのよ……」

「あなたは誰と戦ってるんですか？」

「まあ……こんなこと言っついて、こういう『こんなＳＳ企画やったら、絶対に他の人とネタかぶるじゃないですかー』みたいなメタネタが誰とかかぶったら……死ぬほど恥ずかしいんだけどね。全力外そうとしてぶち当たる、みたいな」

「ほんとですよ！」

「ともあれ！　せつかくの企画なので、皆様どうぞ楽しみましょう！　他の人はきつと……こんなふざけた楽屋ネタじゃなくて、もつとまともなＳＳを書いていると思うから安心してね！」

「……ふざけてる自覚はあったんですね」